秋水通信

第24号

2018.5.26

幸徳秋水を顕彰する会
四万十市右山五月町 8-22
四万十市立中央公民館
TEL0880-36-2778（田中）
HP:http://www.shuusui.com/
mail:zen-tanaka@heart.ocn.ne.jp

幸徳秋水を語る 神戸のつどい

四月一日、幸徳秋水を語る神戸のつどいが開かれた。

安倍政権のもと、特定秘密保護法、安保法、共謀罪法が強行され、次は憲法改悪（九条の無力化）が狙われているいま、非戦平和、自由平等の旗を掲げ、大逆事件で抹殺された幸徳秋水について、今日的視点で考えることを目的に。

昨年九月、神戸の「憲法を生かす会」のメンバー四人が秋水墓参のために中村にみえ、当顕彰会が生家跡、記念碑、資料室なども案内し、夜も交流を深めた。

その中の津野公男さんは高知県出身で当顕彰会会員である。

この四人が中心になって実行委員会をつくり、「つどい」を準備してくれた。

神戸は高知市出身の小松丑治と岡林寅松が大逆事件に連座（無期懲役）させられた因縁の地である。

桜満開の晴天下、阪急六甲駅近くの会場神戸学生青年センター（灘区）には約八〇人集まった。

津野さんが主催者あいさつをしたあと四人が順次登壇。

最初に、田中全（当顕彰会事務局長）が「現代に生きる幸徳秋水」について。

秋水が刑死して一〇七年。中村では、敗戦翌年から、官民あげて秋水顕彰運動に取り組んでおり、戦後中村の平和民主運動のバックボーンになってきた。

二〇〇〇年には、中村市議会が秋水顕彰決議もおこなった。

しかし、いまの日本の状況は大逆事件当時に酷似してきた。国が戦争を始めようとすると、国論統一のために、まず言論、人権が圧迫される。

大逆事件忘れてはいけない。同種の事件を二度と起こさない運動の輪を広げていくことは、憲法を守り、人権を守り、日本の平和、自由を守ることにつながっている。

次に、今村稔さん（社会主義協会代表）が「秋水と平民新聞　そして堺利彦」について。

明治三〇年代、社会主義思想が萌芽し、日清日露戦争を経て、運動の形となった。秋水、利彦により平民新聞がつくられ、非戦を呼びかけた。ロシア労働者との連帯もあった。

政府はこれを徹底的に弾圧。赤旗事件に続き、大逆事件は日本の首を絞めた。社会主義運動は冬の時代に入る。

三人目は、飛田雄一さん（神戸学生青年センター館長）が「大逆事件と神戸多聞教会」について。

神戸で連座した小松丑治が入獄中、その妻ハルを援助したのがキリスト教神戸多聞教会今泉牧師であった。飛田さんは同教会会員。偶然の縁から、今泉牧師の孫との交流について報告。

最後は、戸崎曽太郎さん（治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟兵庫県本部会長）から「神戸と大逆事件（小松丑治、岡林寅松）」について。

高知市の小学校同級生で神戸海民病院に勤務していた二人は、秋水らの思想に共鳴し、神戸平民倶楽部をつくり平民新聞の読書会を開いていた。ただそれだけで大逆事件にひっかけられた。

二人は二十年間入獄後、仮釈放されたが、世間から迫害を受け続け、戦後まもなく不遇の死をとげた。

会場には大阪の「管野須賀子を顕彰し名誉回復を求める会」メンバーもみえ、発言もあった。今後関西における交流、運動の輪が広がっていくことが期待される意義ある集まりとなった。

顕彰会持参の秋水関連書籍、絶筆色紙なども販売、一〇名から顕彰会入会の申し出があった。

準備・主催してくださった皆様にお礼を申し上げます。

岩崎革也
資料展示と講演会

三月一〇日、京都府南丹市立文化博物館（南丹市園部町）で開催。

主催は京都丹波岩崎革也研究会。革也孫、ひ孫を含め約百名参加（当顕彰会も）。

岩崎革也（一八六九～一九四三）は、幸徳秋水、堺利彦らの運動を経済的に支援した京都府須知町（現京丹波町）の地主、銀行家。

平民新聞にたびたび多額の寄付をおこなうなど、経済的基盤を持たない秋水らの運動にとって一大スポンサーであった。

大逆事件後、利彦が遺族慰問の旅にでた（中村にも来た）旅費三百円も革也が出した。

五年前、旧岩崎邸が取り壊されたさい、所蔵資料を同博物館に一括寄贈保管。

書簡は、秋水、利彦のほか、幸徳千代子、駒太郎、大石誠之助、森近運平、福田英子、北一輝からのものなど。書は、利彦、犬養毅、田中正造など。多数展示された。

革也研究会メンバー四人から研究発表が行なわれた。

「岩崎革也日記抄」も刊行、参加者に配布された。

岩崎革也　４４歳
【1913（大正２）年10月撮影】

追悼　初代会長　森岡邦廣さん

森岡邦廣さんが二〇一八年二月一七日、肺炎で亡くなられた。九十二歳。

森岡さんは大正十四年（一九二四）、幡多郡蕨岡村（元中村市）生。旧制中村中学卒業と同時に昭和二〇年二月十九歳で出征、満州へ。八月終戦は本土決戦に備えていた高知春野で迎えた。

戦後は地元営林署に入り、上司から「辞めらされんばあ～にしてくれ」と言われたほど労働運動一筋。秋水との出会いも組合活動からであった。

昭和三十四年（一九五九）六月、坂本清馬が再審請求準備のため最初に上京したさい、幡多全労協書記長として同行し、坂本昭参議院議員、森本靖衆議院議員や総評幹部らに支援要請。

坂本議員（のち高知市長）は、翌年結成された裁判支援組織「大逆事件の真実をあきらかにする会」の初代事務局長に就いてくれた。

坂本議員秘書景平和平氏、全逓労組中央執行委員として専従派遣されていた長谷川賀彦氏（のち中村市長）は東京で精力的に動いてくれた。二人とも同じ蕨岡出身であり、「蕨岡組」が果たした役割は大きかった。

この裁判を機に、大逆事件犠牲者の名誉回復・顕彰運動が全国に拡がり、いまに至っているが、森岡さんはその火付け役の一人である。

中村地区労会長を経て、昭和四十三年からは中村市会議員（社会党）に。五期二十年、議長もつとめた。

この間、秋水にぞっこんで、秋水と言えば森岡さんと誰もが認めるほどに全国の顔になった。

二〇〇〇年三月、従来の労組中心から一般市民を含む幅広い組織へと、幸徳秋水を顕彰する会を結成したさいも当然森岡さんが初代会長に。

同年十二月、中村市議会が秋水顕彰決議をあげたさいは、すでに議員を引退しておられたが、森岡さんの「強引」な根回しがなかったなら、全会一致はなかったであろう。

〇七年、会長を北澤保さんにバトンタッチしてからも御意見番の顧問に就いてもらった。

小学生時代から剣道をずっと続けられ（市体育協会会長にも就任）、北澤さん、久保知章さん（三代目会長）が昨年相次いで逝かれても、なおお元気であられたが、ついに後を追われてしまった。

いまは後輩二人と尊敬する秋水先生を囲んで熱い談義を交わしていることであろう。

森岡さん、長い間ありがとうございました。（田中全）

左森岡さん、瀬戸内寂聴さんと
中央二河通夫さん(新宮)、右北澤保さん
2001年、秋水刑死９０年記念講演会

秋水墓前祭

秋水刑死一〇七年墓前祭を今年も一月二十四日、小雪舞う中、開いた。約六十名参加。

宮本博行会長が追悼文朗読したあと、順次白菊を献花。

地元吟詠会二人（森景信、中尾幸生）がそれぞれ秋水漢詩（絶筆偶成、母へ）を詠った。

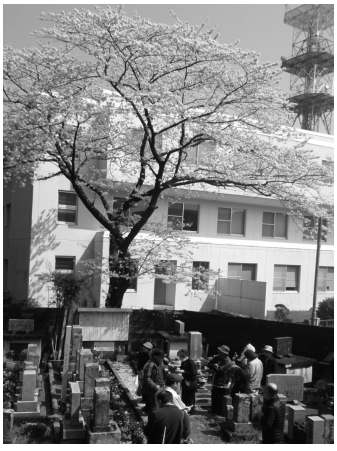
また、この日、秋水墓の山側に並ぶ俵屋・幸徳家先祖墓（元禄年間まで遡る）に新たに看板を立てた。

俵屋・幸徳家先祖墓看板設置

秋水桜を観る会

満開の三月二十五日集い、詠んだ句

秋水桜真白き彩でありにけり　昭男
人はそを秋水桜と呼びにけり　健二
大逆の恩讐いずこかさくら咲く　正
秋水の声聞こえけり桜花　節子
秋水桜墓守る人を包みこむ　文鳥



秋水絶筆碑前舗装

四万十市が絶筆碑前の道を舗装、きれいになりました。隣接する幡多郷土資料館（お城）整備事業の一環として。

大石誠之助が新宮市名誉市民になった!!

「大逆事件」の犠牲者を顕彰する会顧問　辻　本　雄　一

大石誠之助

二〇一七年の夏前頃であったろうか、新宮市の某市会議員から「いまなら、勝てるよ」と私の耳元で囁かれたのは。以前、私たち「「大逆事件」の犠牲者を顕彰する会」は、みじめな敗北感を味わっていたから。「勝つ」とはここでは、大石誠之助の名誉市民実現が、市議会で可決できるという謂いである。それから間もなく、「顕彰する会」の会員の議員らの、他議員への積極的な働きかけが始まった。それは秋ごろからと聞いている。

私たちの「顕彰する会」が、大石誠之助を名誉市民にという要望書を新宮市長に提出したのは、二〇〇九年一一月。その書き出しで「先ごろ、辻原登氏の小説、大石誠之助をモデルとする『許されざる者』が刊行され、大石誠之助の魅力ある人物像が改めて注目を集めています」と述べているように、毎日新聞に五八二回に亘って連載された「許されざる者」が大きな起爆剤になったことは間違いがない。私たちには「100年フォーラムIN新宮」の場（「大逆事件一〇〇年」の催し）が、大石名誉市民の実現のもと実施できないかの目論見もあった。しかし、私たちの請願がなかなか理解してもらえず、議員提案の形も模索したが功を奏さず、市議会では否決されたままになって、七年余りが経過していた。

＊

私たちの「顕彰する会」が、貴会（幸徳秋水を顕彰する会）との交流の中で発足し、二〇〇〇年九月土佐中村（その頃はまだ中村市であった）への訪問がひとつの出発点となったことは、誰もが認めるところである。それより先の六月、「人権と文化　新宮フォーラム」（「大逆事件」九〇年）も開かれている。

大石誠之助顕彰の機運も、市議会で話題になり、市議会での質問を契機に市当局が動き出したという真相もある。その辺の詳細は、田中伸尚著『大逆事件』（岩波現代文庫版P414以下）に劇的に描写されている。私も請われて市の広報に大石誠之助らの紹介を行い、初めて訪れた中村の印象記を記したことがある。くろしお鉄道の中村駅に降り立って、まずその空気感が新宮とよく似ているという直感だった。その後、何度か訪れる機会に恵まれ、そのたびに直感が間違っていなかったことを認識させられた。殊に北澤保さんに案内していただいた足摺岬での紺青の海が、北澤さんのお人柄とともに、いまでも目交いから離れない。

もうひとつ「顕彰する会」発足の起爆剤になったのは、「初期社会主義研究会・新宮大会」である。一九九九年八月、新宮市の高田グリーンランドで講演会と懇親会が開かれた。いまでは中上健次の主宰した熊野大学夏季セミナーの会場として定着しているが、町中から車で三〇分余の山間の保養施設、しかも当日は豪雨、多くて二〇名余との推測で資料も用意。ところが予想に反して一〇〇名近くが押し掛け、これは大変と、短パン姿で臨もうとした山泉進さんが、急遽着替え、資料も急いでコピーして間に合わせ。矍鑠としておられた堀切利高さんが改めて新宮の地での関心の深さに驚嘆しておられた姿も思い出される。山泉さんが「大逆事件は動いている」と題して講演、堀切さんが「荒畑寒村と田辺」と題して話し、大阪から駆け付けた荒木傳さんと成石平四郎の孫岡功さんがその思いを語った。まだ大学院生であった梅森直之さんも参加されていたと記憶する。この時の懇親会では、初期社研のメンバーとほぼ重なる「大逆事件の真実をあきらかにする会」の活動なども話され、大いに盛り上がって、新宮での「顕彰する会」の会員に参集していった。

私たちの「顕彰する会」が発足して、行政や議会に働きかけて、「（大逆事件の犠牲者たちは）平和・平等・非戦を唱えた郷土の誇るべき先覚者」であるとして、「大逆事件の犠牲者六名の名誉回復を宣言する」と決議したのは、二〇〇一年九月、市長提案として、議会が全員一致で可決した。さらには、二〇〇三年七月、「志を継ぐ」の顕彰碑が、市の公金を支出して建立された。

＊

大石名誉市民に向けて、二〇一七年が生誕一五〇年という節目の年であったということもあって、新宮市議会では、二一月五日、「新宮市名誉市民条例」の一部を改正して、議員が名誉市民を推挙できる制度に改めた。そのうえで議会最終日の一二月二一日、大石誠之助を名誉市民に推す議案が提出された。市議会での議決は、賛成一一反対四であった。反対意見も、大石の業績が名誉市民に値しないとする意見ではなく、その選考の手立て、方法などへの違和を唱えたものだった。幾年かの経過の中で、議員諸氏もそれなりの学習を積まれ、各自の考えのもとに、今回賛同の意を示されたのだと思う。そうして、本年（二〇一八年）一月一七日市長の裁決によって大石の名誉市民が決まり、二四日にその授与式が挙行された。

今後は先覚者としての大石を通して、いかに熊野での人権意識や博愛・平等、平和の思想などを学んでゆくべきかにかかわってくる。

さらに三月、臨済宗妙心寺派の僧侶峯尾節堂が百回忌に当たり法要が行われた。「顕彰する会」の副会長を長く務めた正木健雄氏が自力で設立した資料室が、四月から「顕彰する会」が引き継いで「熊野・新宮「大逆事件」資料室」（栗林確室長）として、狭いながらもリニューアルオープンした。一〇月の「大逆事件サミット」ではゆっくりと鑑賞していただけることと思う。

第4回大逆事件サミットin新宮

二〇一八年一〇月六日（土）一四時
和歌山県新宮市福祉センター
翌日は墓参・見学等予定

中村町人文化と幸徳秋水

田中　全

幸徳秋水（伝次郎）は明治四年、両親にとって六番目の末っ子として生まれた。

父幸徳篤明は四代俵屋嘉平治を襲名する商家であり、母多治は医師小野雲了（亮輔）の娘。小野家は代々山路村庄屋をつとめた士族格の家柄で、雲了は小野家三男のため中村に出て医師となっていた。

幕末とはいえ士農工商の身分制度が厳然たる江戸封建時代、最下級商人のもとに最上級士族の娘が嫁ぐことは異例なことであった。

これには中村という町の歴史的背景がある。

一條家、長宗我部に続き、関ケ原合戦のあと、中村を支配したのは山内康豊。土佐藩初代山内一豊は弟康豊に中村を分け与え、独立した中村藩（二万石、のち三万石）とした。

しかし、元禄二年（一六八九）、中村藩五代直久（大膳）が幕府若年寄に抜擢されたにもかかわらず、これを辞退したことを口実に、将軍綱吉から取り潰された（幕府直轄後土佐藩に併合）。

禄を失った家臣は散り散りになり、武家屋敷は残らず取り壊された。城に代って奉行所が置かれ、以後は上級武士二名が高知から交代で来るのみで、中村には藩直属武士がいなくなり、さらに洪水、火事などの災害も加わり、町は荒廃した。こうした中村を支え、復興したのが町人であった。宇和屋、俵屋、吸田屋などが町老（年寄）となり、商人中心の自治的運営がなされた。藩もこれを認め、中村の町はいわば特別行政区的存在になった。

中村がいまでも「おまち」と呼ばれ、格の高い響きをもつのは、このためである。（中村市史）

商人の間では、和歌、俳諧、絵画等が流行した。こんな雰囲気の中、宇和屋から学者遠近鶴鳴が生まれた。

鶴鳴は商いで京阪に出た際、篠崎小竹（大阪）から朱子学、岩垣松苗（京都）から国学を学び、さらに一條家学問と土佐南学の流れも受け継ぎ、私塾鶴鳴塾を開いた。

樋口真吉（足軽）、安岡良亮（郷士）、木戸明（吸田屋、のち地下浪人に）などはここで学んだ。町人学者のもとに士族の子弟が通ったのである。

秋水の父篤明も俳諧を趣味とする文人であった。商売、文化両面から幸徳家（俵屋）は一目置かれる存在であった。

小野雲了は格式ばかりうるさく貧乏な士族の家より、生活が楽な商家のほうがいいかもしれないとの配慮もあって、長女多治を幸徳家に嫁にやった。

そんな雲了ではあるが、多治の妹嘉弥子は、やはり自分の姉菊が嫁いでいた郷士安岡良輝の二男良哲（良亮弟）と縁組させた。

また、小野家には男子がいなかったことから、蕨岡の庄屋桑原家の二男道一と養子縁組し、その嫁には安岡良亮の二女英（ふさ）を迎えた。

英の姉芳（よし）は道一の兄桑原戒平に嫁いでいたので、兄弟と姉妹同士が一緒になったことになる。

遠近鶴鳴墓（羽生山）

さらに、安岡家は木戸家とも姻戚関係にあった。（良亮と木戸明は従兄弟）

一方、秋水は二歳の時父を失い母子家庭となる。伯父篤道（父の兄）が後見人となり、一家で同居。また、中継養子駒太郎も迎えたことから、幸徳家は複雑な大家族となった。

そんな中、秋水は八歳で木戸明の遊焉義塾に入るが、周りはみんな士族の子どもたち。安岡秀夫（良亮の子）、桑原順太郎（戒平の子）、小野栄久など。

秀夫の兄雄吉（のち代議士）が東京から送ってくるハイカラな雑誌（「絵入自由新聞」など）から刺激を受けた。

塾の中で秋水は一番優秀であったとはいえ、商人の子はやはり商人の子と見られる。彼らはみんな母方の親戚の子であったが、だからこそコンプレックスだけでは説明できない、わけのわからないモヤモヤが生まれたのではないか。

秋水が入学した中村中学は途中で廃校となり、高知中学に吸収された。安岡秀夫らはそのまま高知に進んだが、秋水は父亡き後の経済事情もあり二年遅れた。このため挫折中退。屈辱はさらに深くなった。

家に帰っても伯父や伯母が差配を振るい、母はじっとがまんしている。

そんな環境、境遇からくるストレスが

幸徳秋水生家跡（京町）

爆発し、わずか十六歳で家を飛び出し、東京の林有造の門を叩いたのではないか。

その後、中江兆民との運命的出会いがあり、その薫陶を受け、やっと腰を据えて勉強に集中する。自由・平等・博愛思想をたたき込まれ、非戦平和から人間解放の社会主義に思想を深化させていく。

その過程で堺利彦と平民社を立ち上げ、平民新聞を発行。「平民」、「平民」と、ことあるごとに平民にこだわった心の内が読み取れる。

秋水は自分の親戚の出世頭は熊本神風の乱で斬られた安岡良亮（初代熊本県令）だったと誇らしく語っているように、親類縁者を大切に思う心はずっと持ち続けていた。雄吉、秀夫らとの付き合いも生涯続いている。

秋水の思想形成に最も大きな影響を与えたのは中江兆民だが、兆民思想が注ぎ込まれる土壌になったのは、複雑な姻戚関係等秋水の家庭環境にあった。

秋水は身分、階級というものに敏感な少年に育った。

その根源は、町人と士族という両親の異例の縁組にある。

さらに言えば、町人が実力をもち、町人文化が栄えた中村という町だったからこそ、そんな組み合わせが生まれたということである。

（一月二十四日、幸徳秋水刑死一〇七年墓前祭記念講演会要旨。当日の演題は「中村町民文化と幸徳秋水」）。

幸徳秋水研究会

毎月第2日曜午後1時半～

四万十市立中央公民館